〔第30回学術集会　実践促進委員会・将来構想委員会共同企画〕

家族看護グッドプラクティス賞創設
―最優秀賞を受賞した2つの取り組み報告―

実践促進委員会
委員長　藤井　淳子

将来構想委員会
委員長　井上　玲子

日本家族看護学会実践促進委員会と将来構想委員会は，家族看護の将来への発展を後押しすることを目的として，今年度，家族看護グッドプラクティス賞を創設した．本賞は，言語化されていない優れた家族看護「実践」を発掘することから始め，現場と家族看護をつなぐ道の第一歩にしていきたいと考えた．創設初年度でもあり応募の有無を不安に感じていた両委員会であったが杞憂に終わり，応募数は13件におよんだ．

応募された内容は，緩和ケアやグリーフケア，コロナ禍，新しい医療，在宅支援，救命センターなどのキーワードを軸に家族看護の発掘ともいえる報告や，家族と協働した新たな取り組み報告もあった．また，実践の現場からだけではなく，家族看護に対する教育方法の検討や，家族看護理論の活用の実際等，多岐にわたる応募内容であった．まさに，臨床に埋もれている家族看護実践が言語化されていた．

甲乙つけがたい応募内容の中で，家族看護の実装や普及にかかる顕著な実践活動を行っている団体や個人の顕彰のため，本学会の各委員会の委員長からなる選考委員会を立ち上げ，下記6項目（表1）について審査をお願いした．

表1．審査項目

テーマの重要性	家族看護にとって貢献度が高くインパクトがある
取り組みの有用性	実践・教育現場で家族看護の発展に寄与し，実践としての効果が高いものである
取り組みの汎用性	家族看護の実践・教育の場面で可視化できるものである
取り組みの創造性	独自性があり，工夫・熱意・ユニークさが評価できるものである
取り組みの構成力	取り組みに向けての人材配置や資源分配，手順等が評価できるものである
将来発展性	今後の実践への可能性を広げる有意義な取り組みである

結果は，同点で2つの取り組みが受賞した．以下，最優秀賞を授賞した2つの取り組み報告である．光る家族看護実践から次年も続く家族看護グッドプラクティス賞につなげたい．

【最優秀賞】

「子どもを亡くした家族のグリーフ支援」
藤田　紋佳（NPO法人福岡子どもホスピスプロジェクト，第一薬科大学看護学部，日本学術振興会）
濵田　裕子（NPO法人福岡子どもホスピスプロジェクト，第一薬科大学看護学部）
森口　晴美（NPO法人福岡子どもホスピスプロジェクト）
相星　　香（NPO法人福岡子どもホスピスプロジェクト，九州大学大学院医学研究院保健学部門）

「コーエン症候群の患者・家族と研究者のコラボレーションによる家族会支援の実際」
倉石　佳織（東京家政大学）
北村　千章（清泉女学院大学大学院）